

\*\*\* 紹 介 \*\*\*

深瀬 泰旦 著

『わが国はじめての牛痘種痘・植林宗建』

(肥前佐賀文庫〇〇二)

この本の著者・深瀬泰旦氏は、生地の川崎市で一九六一年に小児科医院を開業し、以来、川崎における種痘史を研究し、一九七八年に順天堂大学医史学研究室に入り、現在は当学会の常任理事をつとめておられる。二〇〇二年に『天然痘根絶史——近代医学勃興期の人びと——』を思文閣出版より発刊された。

このように研究は川崎宿場から登戸の医家・太田家、江戸歩兵屯所、お玉ヶ池種痘所へと発展した。従って、牛痘種苗が上陸した頃の長崎の医術のことや、牛痘接種の推進に努力した植林宗建について一冊書いてほしいと感じていたのは筆者一人ではあるまい。

幸にも、佐賀県における堅実な文化活動に情熱を燃やす「出門堂」のすすめから、「肥前佐賀文庫」の一冊として本書が書き下され出版されたことは真に喜ばしい次第である。本書には桜紅色のカバーがつけてあり、手にとってみると、一般市民特に高校生らに焦点をあて、佐賀藩医植林宗建の略伝をソフトにまとめたと感じるのである。

一〇〇頁たらずの小冊子ではあるが、色彩付の挿絵が六

枚、人物肖像画一〇枚、器具や書物類写真三枚がもり込まれている。中でも出島オランダ屋敷図は二頁一ぱいにカラーがきらめき、長崎警固役は佐賀藩と福岡藩だったんだと思いださせるのに役立っている。

中島川をへだてた出島対岸の「植林鎮山旧宅跡」地を筆者は折にふれて訪れていたが、鎮山の子孫が「牛痘小考」や「磨尼 缺対談録」を執筆したことに気づかずには済ませていた。今回、この宗建の労作二著の本文を写真コピーで鮮やかに六頁で示された点は、色彩付挿絵との対比により非常に鮮明な仕上りとなり、読者をぐっと長崎に引きつけるだけでなく、医史学に関心をもちたせる作用をもっていると思う。

本文においては人名や、漢名にはルビをふって、植林宗建だけではなく長崎医人の一断面、例えば福地載哉(荷庵・こうあん・源一郎の父)の小伝や、通詞職の本家を含めた植林一族の系図などももり込まれ、九州人ばかりか、洋学史に関心をもつ人々にも役立つ構成になっている。

欲をいえば(高校生向きでなくなるかも知れないが)、兄栄建の京都での仕事では立ち入って触れてもらいたかったし、「磨尼 缺対談録」の内容をもう少し本文中に入れていただければさらに良かったと考える。実は、植林宗建が牛痘種痘に成功した翌年(嘉永三年一八五〇)、オランダ商館長レイフスゾーンの江戸参府に随行したモーニッケ医師は、

陽暦四月九日に川崎宿に泊まり、夜盗に入られ顕微鏡他をぬすまれている。残念なことに植林系通詞は同行していないが、何か縁の切れない幻想を感じる。それは長崎銭座町の天王山聖徳寺の植林家墓地の反対側奥の通詞系墓地に、植林博太郎（順天堂大学神経学講座創立時の教授）氏の建立された新墓もあり、モーニツケ、川崎、深瀬氏、順天堂、植林家、長崎とは牛痘接種史の輪でつながっているからである。筆者は次に長崎に行くときは、この本を持って聖徳寺の石段を登ると決めている。

いろいろの視点からも、役立つ著作であるので各方面の方々に是非ご一読いただきたいと存じます。

(中西 淳朗)

〔発行所 出門堂<sup>シツモンドウ</sup> 福博印刷竹文化事業推進室、〒八四九〇九一八 佐賀市兵庫南四丁目二番地四〇号、電話〇九五二（二五）二九八八・直通、定価一〇九五円・税別〕

篠田 達明 著

『歴代天皇のカルテ』

さきに『徳川将軍家十五代のカルテ』の好著を発刊された篠田氏が今度は一二五代にわたる天皇家のカルテに挑戦された。

日本人はどんな病気にかかるか、どんな病気で死ぬか、い

ろいろな研究があるけれども、日本人の代表として一二五代つづいた天皇家歴代のカルテを見れば手っ取りばやくわかるというものである。宮中奥深く居住して庶民クラスとは生活環境が違うといっても、庶民の間に流行した病気はいずれは皇居内にも及び、避けることはできないものである。万世一系で遺伝的素質が違うといっても、日本人である以上DNAは同じであろう。天皇家の病気は日本人の病気の象徴でもある。

そういう意味でこのたび篠田達明氏が著された『歴代天皇のカルテ』は日本人の病気史でもある。

庶民の病誌はほとんど残されなくて煙滅してしまうが、天皇家のそれは時代によって異なるとはいえ、なんらかの形で残されることが多い。著者は多くの史書を渉猟して克明にそれを追跡し、生々しく描き出してくれた。

圧巻は本書の巻末に載せられた『歴代天皇一二五代のカルテ一覽表』である。これに見る歴代天皇の病歴・死因の実態から感ずることは古代から江戸時代までと近現代との間に大きな断層が見られることである。著者によると、明治以前の日本人の死因として最も恐れられた病気は痘瘡であって、今は見られないこの疫病により、平安期から江戸期まで、七六帝のうち三七帝が罹患し、さらに後朱雀、六条、後光明、東山、孝明の五帝がこれによって急逝されている。また日本列島はかつてはマラリア列島といってもよいほどマラリア原虫（三日熱）が地方的に存在していて、マラリアにかか